ジャンル別アレンジ/サウンドメイク
ポップス、AOR

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ポップス、AORとは？

AOR＝「アダルト・オリエンテッド・ロック」
「大人向けのロック」のような意味合い。

AOR系のアーティストはスタジオミュージシャン、
セッションミュージシャンを積極的に起用、
都会的で洗練されたサウンドを作り出した。

80s以降、音楽産業が発展していく過程で
ポップで耳障りのいいものが好まれ、
AOR系のサウンド、ギタープレイは一般的になる。

現在ではAORに影響を受けた80sの日本の楽曲が
「シティポップ」と呼ばれ海外で再評価を受けている。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ポップス、AORの特徴

80sポップスの傾向として、煌びやかなシンセ、
ゲートリバーブを使った派手なドラムサウンドなど、
キラキラ、派手な音が好まれた。
ギターもそれに負けじと高音を強調したキラキラした音色、
空間系エフェクトを駆使した都会的なサウンドが流行した。

フレーズ面でもペダルトーン、分数コードなどを多用して
キャッチーで耳辺りのいいプレイが特徴。
往年のロック的荒々しいサウンド&プレイは影を潜め、
洗練された都会的な演奏がトレンドだった。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

ポップス、AORのサウンドメイク

GuitaRigのみでなく、DAW側のエフェクトも駆使。

接続順は「イコライザー」→「GuitarRig」→「エキサイター」→「コーラス」→「ディレイ」

ギターはストラトのハーフトーンを使用。

イコライザーは80hz以下をローカットして重くならないように。
3.7khzをブーストして煌びやかさを出し、
280hzをカットしてモヤモヤ感を抑えた。

アンプは真空管アンプは使わず、歪みないクリーントーンを出せる
JAZZ AMP（JC-120のシミュレート）をチョイス。
アンプ前段にペダルコンプ、後段にアナラグコーラスをインサート。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

ポップス、AORのサウンドメイク

さらにDAW側でエキサイターで高音をキラキラさせ、
コーラス（Waves Doubler）をかけ（GuitarRig側と併せてコーラス2段がけ）
4分音符程度の長目のディレイをかけた。

コーラスの2段がけは当時のスタジオミュージシャンの流行だが、
揺れ方が違うタイプを選ぶと良い。
ここで使ったDoublerはコーラスというよりピッチシフターなので
音揺れがなく、GuitarRig側のコーラスとも相性が良かった。

ディレイは実音が煌びやかな分、高域が落ちて暖かいサウンドの
テープディレイをチョイスしてバランスを取った。

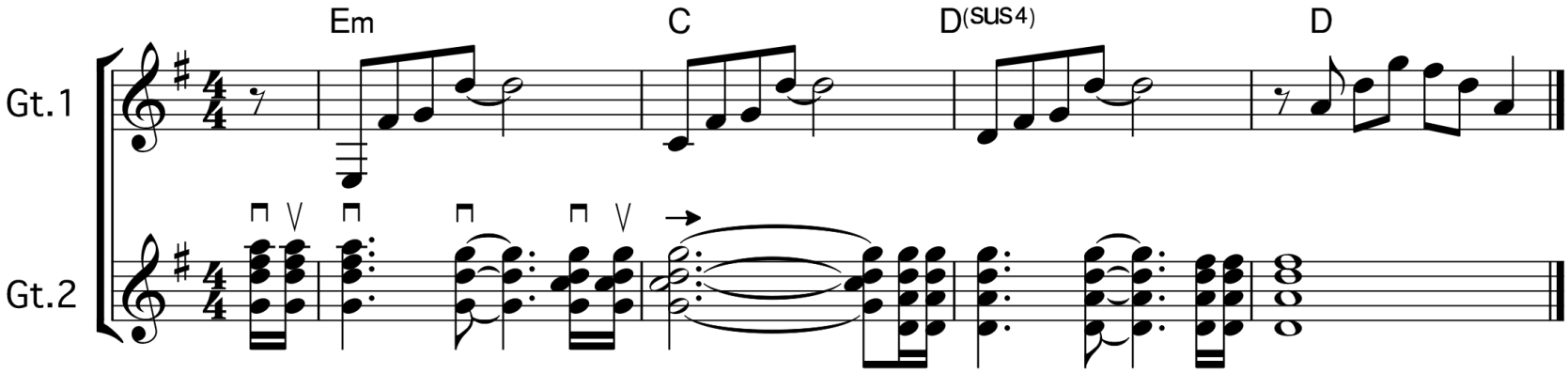
©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

ポップス、AORのサウンドメイク

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ポップス、AORのアレンジパターン①



AOR寄りのロックバラードをイメージ。

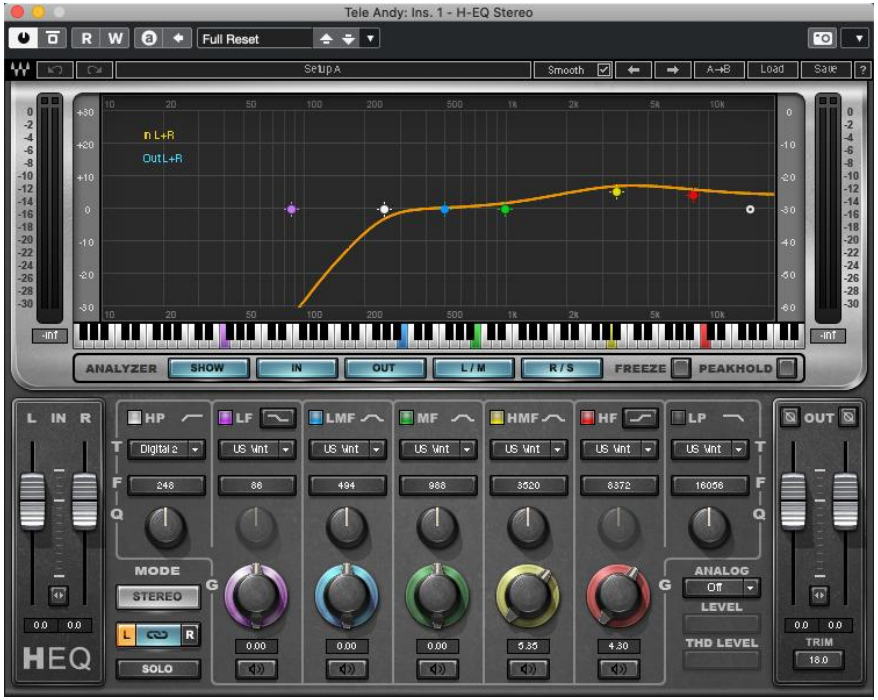
Gt1のフレーズは半音テンションを含むが、
開放弦を混ぜたこのような音使いはAOR系の定番。
音色とも相まって幻想的に響く。
コードが変わっても同じフレーズをリフレインするのもこの時代の定番。
音色はストラト音源のハーフトーン。左右ユニゾンで2本いるが、
音色をそれぞれ「ブリッジよりハーフトーン」「フロントよりハーフトーン」と
変えてある。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ポップス、AORのアレンジパターン①

Gt2は歪み感を出すためJCM800系のアンプで軽めのクランチで音作り。
Gt1に比べてディレイを深めに設定、付点8分の長さでかけてある。
このパートは音程感より「シャリーン」という煌びやかさが出ればOK。
かなり極端にローカット、ハイブーストしてある。



©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

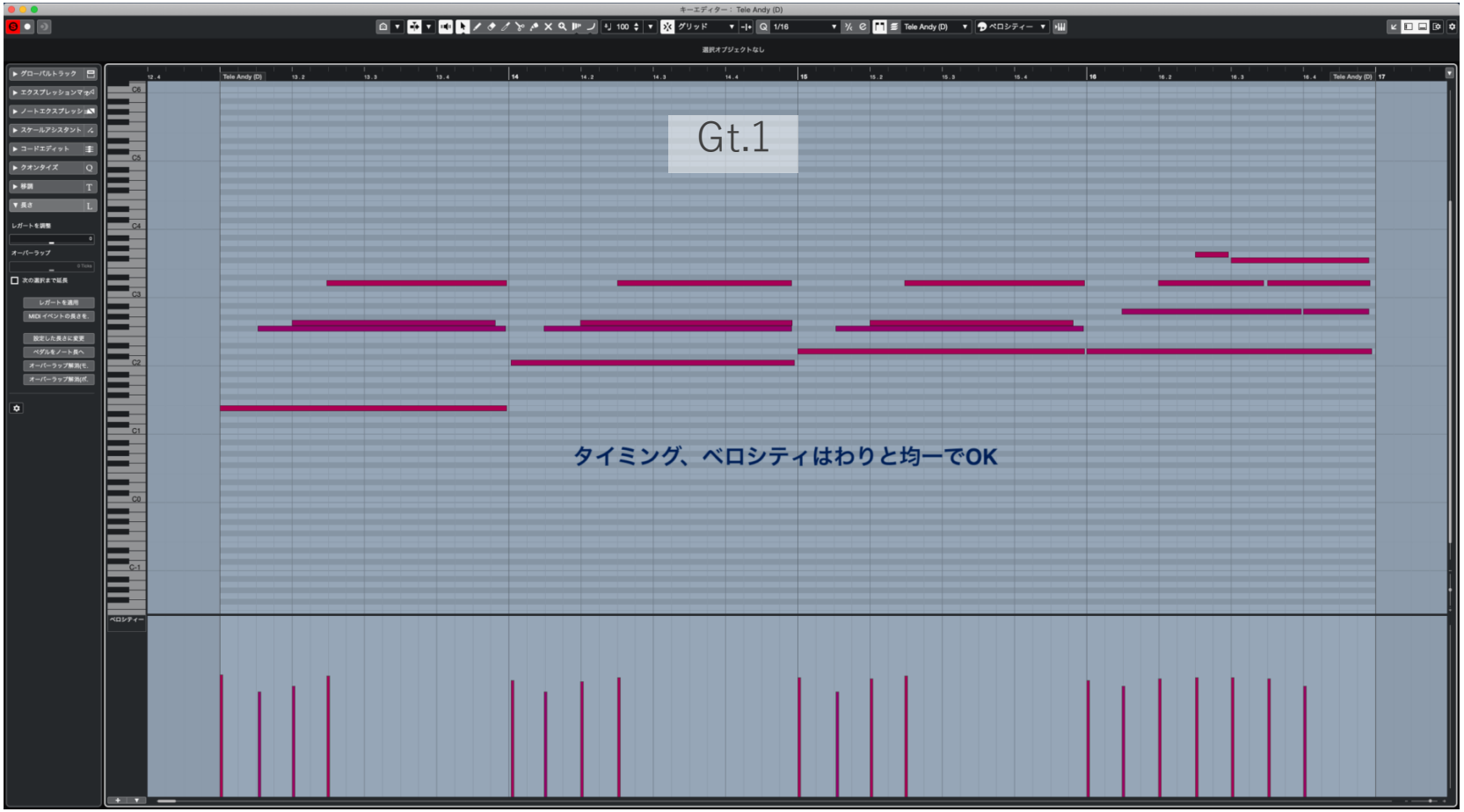
ポップス、AORのアレンジパターン①

基礎編通りに打てばOK。
特筆するとすれば、この年代らしいタイトさを出すため、
タイミングはわりとジャストでOK。ベロシティもわりと均一で問題なし。

Gt2はピッキング順に合わせてタイミングを軽くずらして入力。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

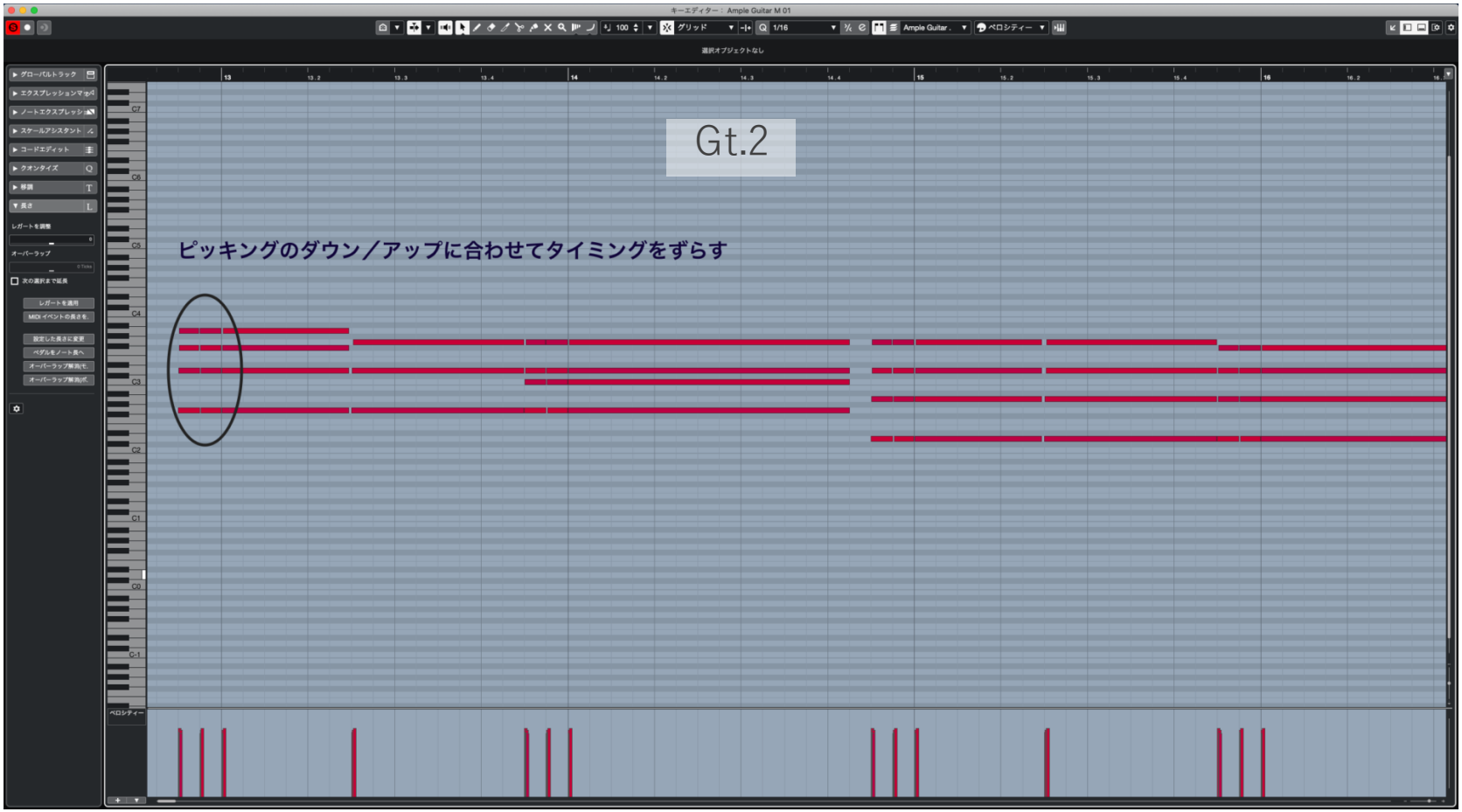
ポップス、AORのアレンジパターン①



©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

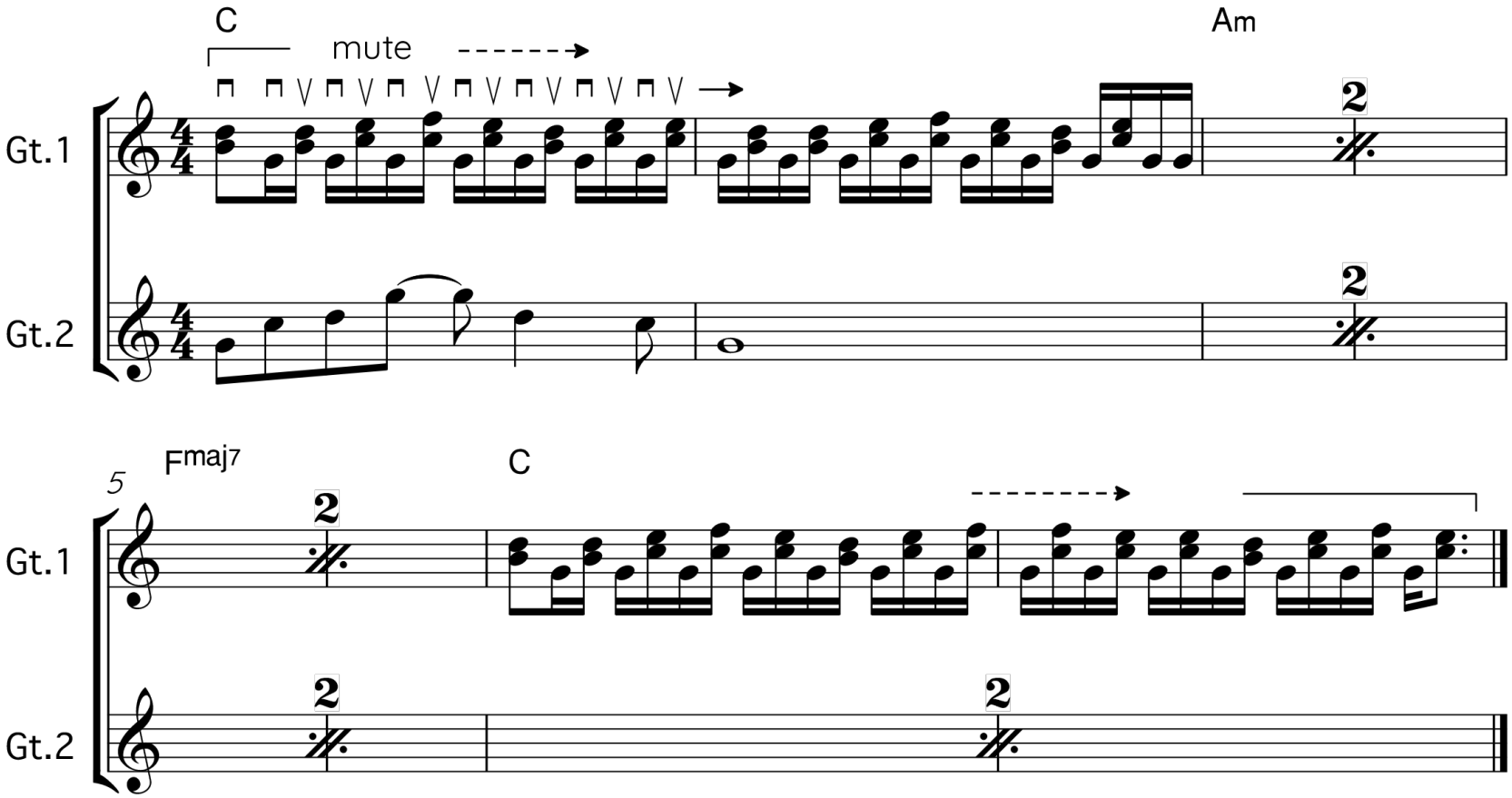
ポップス、AORのアレンジパターン①



©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ポップス、AORのアレンジパターン②



©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ポップス、AORのアレンジパターン②

80sポップスのヒット曲をイメージ。

Gt1は常にミュートしながら16分のシーケンスをオルタネイトで演奏。
刺繍音的に動く経過音が瞬間的にF/C、G/Cなどの分数コードと
捉える事もできるが、これはギターに限らず80sの
コードワークの特徴でもある。

サウンドは①のGt1と同じ。
やはりストラトのハーフトーンを左右でユニゾンにしてある。

Gt2はストラト音源のフロント。8分でやはり
同じフレーズをシーケンスしているが、こちらはR、2nd、5th、という
どのコードともぶつかりにくい音だけ使っている。
この3音はリフレインに適していてよく使われる。
コードが展開しても同じフレーズを弾くため、
結果的にテンション感のあるフレーズになっている。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ポップス、AORのアレンジパターン②

Gt1はブリッジミュートで打てばOK。
高音側（8分ウラ）にアクセントがあるので、こちらを強めのベロシティで。
低音側は隙間を埋めるような、弾く時にタイミングを掴むような目的で
弾いてるので、ベロシティ弱めでOK。
和音は全てアップのタイミングなので高音→低音側に
タイミングをずらして入力。

Gt2は均一にカチッと打ってOK。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

ポップス、AORのアレンジパターン②

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

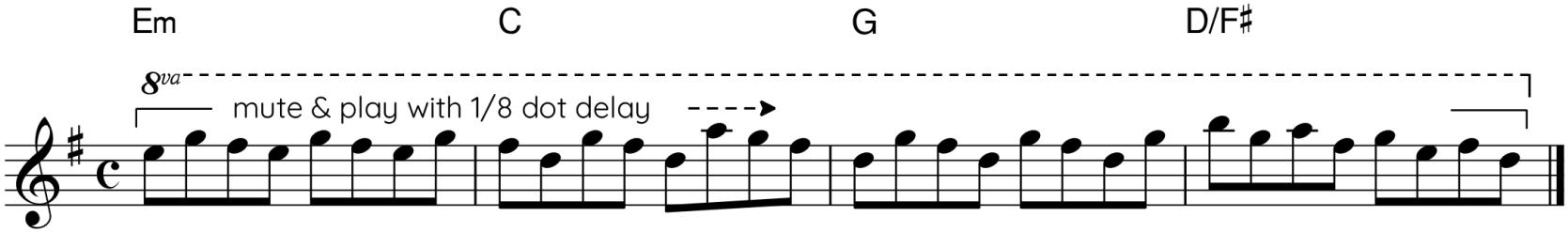
OTO×NOMA

ポップス、AORのアレンジパターン②

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ポップス、AORのアレンジパターン③



付点8分のディレイを活用したフレーズ。最近のJ―Popでもよく使われる。
16分のフレーズに聞こえるが実際は8分音符で弾いてるだけ。

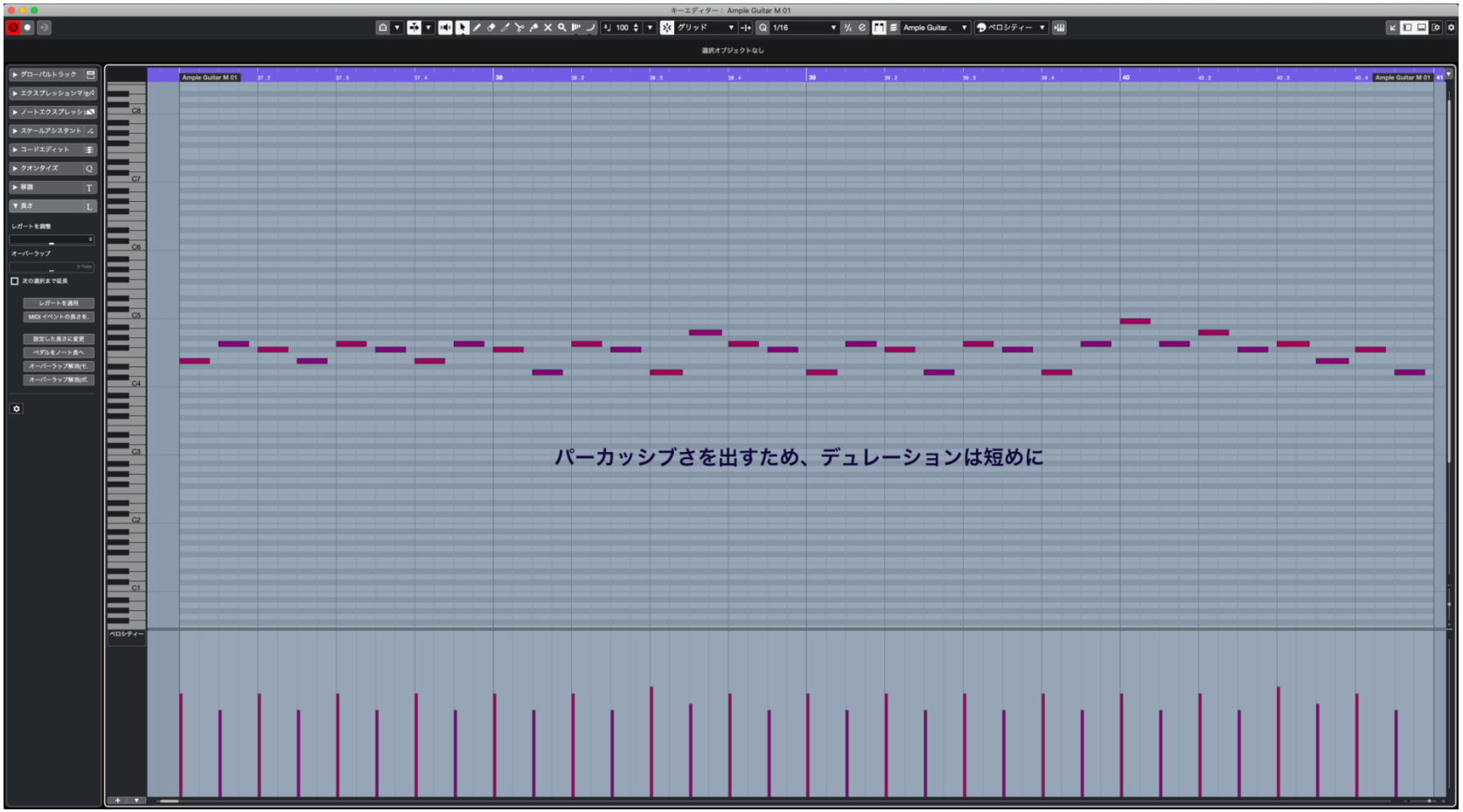
セッティングは・フィードバック低め（２～３回返ってくるぐらい） ミックス50%
ディレイ音がフレーズと同化するように調整すればOK。
その上で、実音とディレイ音に差がつくよう、
ディレイ音にはローカットとハイカットを入れてある。

打ち込みは難しいところはなし。
割とジャストに打ち、ウラ拍を弱めにしてあるのと、
パーカッシブにするためデュレーションをやや短めに切ってある。

©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA

ポップス、AORのアレンジパターン③



©OTO × NOMA ©TEMPEST STUDIO ©Sigeru Aoyama

OTO×NOMA